

埼玉県剣道の現状・課題

剣道専門部 県立児玉高等学校 関河 諒

1、現状

埼玉県は剣道が盛んであり、各種大会で成績を挙げている。本年度で言えば、

- ・関東大会：女子個人2位・3位
- ・インターハイ：男子個人3位、女子団体ベスト8
- ・東京国体：少年女子2位
- ・全日本都道府県対抗：女子優勝

などの輝かしい戦績があり、埼玉県内の高校生に夢と希望を与えてくれた。

また、高体連の大会に目を向けてみても、厳粛な開閉会式や円滑な試合進行、さらに審判の技術や作法など抜かりのない運営をしている。これも各部に配属している指導者一人一人が仕事を全うしているからである。

しかし課題が山積しているのも事実である。そのうちの2つを次項にまとめてみた。

2、現在の課題

① 指導者の年齢層の変化

現在幸いなことに、ここ数年専門部における若手の指導者が増加している。もちろん教員の採用人数が増えていることも理由だが、その中に剣道経験者がいること、もしくは保健体育以外の教科で剣道を経験している教員が近年指導者として増えてきていることが挙げられる。

しかし、現在の専門部約150人のうち年齢層の内訳は、

- 50代・・・ 約65人
- 40代・・・ 約30人
- 30代・・・ 約20人
- 20代・・・ 約35人

となっている。50代の教員が多く、3, 40代の教員が少ない現状である。そこで懸念材料となってくるのが、5年～10年後の50代教員が退職後の大会や会議その他剣道専門部としての活動・運営や大会審判の人数不足である。

前述したように、剣道専門部の会議や大会等の活動・運営は素晴らしいものがある。しかし、現在剣道専門部で重役に位置する指導者、総務・競技・強化・指導普及の各部の部長等の役割を担っている指導者はほぼ50代の教員である。つまり役職の人材が一新するような形になり、様々な面で今までとの違いや躓きが出てくると思われる。

また、50代の教員が退職するということは活動・運営の人数が足りない状況が起こる。特に審判においては、剣道は人が行うものであるのと同時に、一瞬かつ複雑な有効打突を見極める為には有段者であり熟練者でなければ判断ができない。特定の間人しか出来ないが故、人材難は免れず、一人一人の負担が増えることが見込まれる。

更に本年埼玉で第60回の記念関東大会が越谷市立総合体育館で行われ、埼玉県の指導者が一体となって運営に携わってきた。私は初めての関東規模の役員を経験し、改めて運営の大変さに気付かされたのと同時に、数年後には我々若手といわれる教員が中心となって作り上げなくてはならない危機感も覚えた。

もちろん現在各部の引き継ぎを行っており、代替わりを推進しているが、より一層の推進が必要になってくるだろう。

② 高校における剣道人口の減少

「高等学校剣道部員人口調査」によれば、ここ10年間の本県部員は2700名前後であり、全国においても5指に入る剣道人口を有している。

しかし、毎年多少の誤差はあるものの、年々出場校数の減少や団体戦をやっと組める学校、個人戦しか出られない学校が増加してきている。

剣道人口を考えた時に、多くの生徒が道場や中学の経験者である。初心者には剣道などの武道は始めるには比較的抵抗がある種目であるが、この初心者をどう剣道界に取り入れるかが人口拡大に繋がると推測する。

また、中学校まで一生懸命やっていた生徒が高校で続けない環境も見受けられる。もちろん学校の事情等あるので仕方ないことではあるが、特に中学校に目を向けると、剣道を専門に学んでいる教員が少ない。県行事の大会にも人手が足らず高校の教員に審判派遣を依頼している現状もある。生徒を見ると、やはり理解ある指導者に教えてもらった生徒のほうが高校でも続ける傾向にある。

今後は初心者が剣道に興味を持ってもらう為の施策や、中学の経験者を高校でも続けさせるように中学・高校の指導者の連携を密にして活動していくことが重要であると考えます。

現在専門部での取り組みとして、高校から剣道を始めた生徒に対し「剣道講習会・初心者大会」というものを行っている。また、各支部や地域で「中高合同稽古会」等を行っており、互いの情報交換も兼ねた積極的な活動をしている。

3、まとめ

現状としての剣道専門部は非常に良好な状況であるが、課題に挙げたように今までと同じような活動・運営が年々厳しい環境になっていくということを一人一人の指導者が考えなくてはならないと感じる。

恐らくこれらの問題は剣道専門部に限らず、どの種目でも課題となっている部分であると思う。埼玉県全体として盛り上げていけることを熱望する。

私自身も若手として今やるべきことをしっかりと見据え、剣道専門部としての活動・運営、また今後の剣道専門部の発展に尽力していきたい。